

人格の問題

——ベルグソンに於ける二つの自我に就て——

横 山 巖

「一」

人格と呼ばれ、人格性と考へられるものゝ内面的構造を私はベルグソンに於て見出される——特に *Essai sur les données*. 及び *Les deux sources*. —— 二つの自我、或は自我の二相の思想に就て考察しつゝ反省してみたいと考へる。然しその前にベルグソンに就て考へるべき方向を見出して置きたい。

人格性とは自己の具體的存在性に他ならないと考へられる。自覺的な自己の倫理的存在性が、自己の人格性を成すのでなければならぬ。人格の價値的意義もそれに基くのである。従つて差當つて云ひ得ることは、具體的な人格性は、自己の社會性に即して考へられるのでなくてはならないといふことである。社會に於て、始めて自己は具體的であると云はれるからである。然し、人格性と考へられるものが自己の直接的な社會性と直に一つであると云ふことは出来ないであらう。トテム

の成員が「私はカンガルである」と云ふ場合に、それは彼の社會性の意識ではあり得ても、彼の人格性の自覺であると云ふことは出来ぬと考へられる。かゝる社會性を直に人格と見做すのは——例へばデュルケムに於て——實踐的なる自覺が捨象せられた故であると考へられる。然しながら、翻つて、社會性を考へることなしには、自己の人格性と呼ばれるものも、抽象的であつて、靜的な觀念の構成に歸すと云はなければならぬ。人格性が、單に自己の自然性との對立に於て、それ自身で存在する自我の内在的本質として、何等かの超越的な原理に直接に基けられる場合、それに對しては自己の社會性、實踐性は何等積極的構成的な意味を持つことが出来ず單に附帶的なものとなるであらう。かくしてはその靜的固定性の爲めに、例へその規定の形式的普遍性にも拘らず、却つて内容的に特殊な社會性に可分的と考へられ直接な社會性に墮すことが可能となる。個人に於ける理性、精神と呼ばれるものも、社會の造る所となり、人格の先驗性も社會の個人に對する先驗性であると云はれるに至れば、人格性は全く直接な社會性と等置せられることが可能となる（デュルケム 宗教生活の原初形態、古野譯四四九頁）。従つて人格性を具體的に考へるためには、社會性に即して捉へるのでなければ十分ではないであらう。

然しながら人格性が具體的には社會性に即することなしには考へられないと云ふのは、その様に社會性を顧慮することなくしては却つて人格性と考へられるものが直接な社會性に轉落する可能性

を持つといふのみではない。更に重要な點は、自己の本質的存在性と考へられる行爲の動性が、社會性を考へることなくしては具體的に考へられぬといふ點にあると考へられる。人格性を社會性に即して考へるといふことは、單に單なる自然性との對立に於て靜的原理に基いて然考へられた人格の靜的觀念の内容に、新に社會性の規定原理を附加すると云ふ如きことを意味するのでなく、靜的原理から動的構造に進み、人格性を具體的行爲の動性に於て見出すといふことでなくてはならない。若しさうでないならば、社會性に即すと云ふことも何等本質上の意味を持つことが出来ない。社會性に即すと云ふことは直ちに構造的に行爲の動性が人格に本質的であると云ふことを意味するのでなければならぬ。換言すれば何等かの意味で既存する人格性に社會性、實踐性が附加せられるといふのではなくして、實踐の構造が人格性を成立せしめるといふことを意味するのである。従つてこの點より見れば、例へばペルソナの如き自己の社會的規定より出發して、そこから *verhältnismässig* な具體的規定としてのペルソナ性を剝脱し昇華して、結局相互に獨立な人格性を *echte „Solidarität“* (S. 137) として見出さんとしたレーヴィットの思想も (Löwith: *Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen*)、ペルソナの規定に於て自我の社會性に即すとは云つても、その規定に對しては、主體の實踐の動性が本質構造上の意味を持つことがないために、人格性はペルソナの關係性に於て既に豫想されて居る個人の、靜的な核心となつて (S. 127) 靜的な構成に歸すと思はれる。何故ならば

ペルソナの存在性に於て振舞ふ *sich verhalten zu* と云はれる如き行爲性は、そこに於て見出される人格性それ自體に對して構成的のではなく、關係に於て表現され意味付けられる「差當つては相互に獨立な個人の出會ひ」(S. 100)たるに止つて、人格性自身にとつては外面的附帶的と考へられて居ると考へられるからである。獨立なるものと豫想された個人が關係的に振舞ふのであつて、振舞ふといふ行爲自體が人格性に構造的となつて居るのではない。かくしては人格性は關係的であり、關係に於て表現に達すると云ふに止つて、結局直接的な内在的核心と考へられるに歸すと思はれる。即ち人格性を社會性に即して見出すといふことは、かく靜的な社會性から靜的に人格性を抽出し、具體的な社會的實踐性を持たずして、却つてかゝるペルソナの社會性から奪取的に定立せられて行つた極限——自己の自己に對する唯一の關係の可能性としての絶望や自殺に、人格性の究極的な自主性を求める (S. 169-71) 如き方向を意味するのであつてはならないと考へられる。社會性に即すると云ふことは、飽くまで實踐の動性を人格性の構造自體の中に見ることを意味するのでなくてはならない。社會性は實踐の構造なしには考へ得ぬからである。單に觀念論的個人性の抽象を脱却せりと云ふも (Einführung)、それ自身靜的な社會性から抽出された人格性は、それ自體の中に行爲の動性を含まぬが故に、具體的に社會に於て自覺せられた人格と考へることは出來ないと思はれるのである。

扱て以上の如くに考へられるならば、人格性を社會性に即して考へると云ふには自己の行爲の動性の内面的構造を明にするといふ方向が必要である考へられる。ベルグソンに於ては、人格の具體性は、本質構造上持續の動性に於て把へられたと考へられる。それは單に個人的社會的の形式的立場の差違のみを含んで、原理上、人格性を自己の靜的核心として見出さんとする考へ方に對しては、動性として本質的な方向の相違を持つと考へられる。そこにはベルグソンの所謂「外から」の見方と「内から」の見方の差があると云ふことが出来る。而して自己の人格性を具體的社會性に即してその構造を明にする爲めには、ベルグソンに於ける動性の把握としての「内から」の見方が重要な指示を與へると考へられる。何故ならば行爲の動性の内面的把握なくして社會性に即すと云ふも、それは外面的であつて人格性の内面へ構造的に考へこまれることがなく、従つて社會に於て自己の人格性を自覺するといふことも本質的な意味を持つことの出来ないことは、以上の如くであると考へられる故である。

以上述べた如き方向からして、以下私はベルグソンに於ける自我の二相の思想を檢討し、それに依つて具體的な人格性の構造を明にして見ようと思ふ。

〔二〕

「小くとも我々が全く内から、單なる分析に依るのでなく直觀に依つて把へる一つの實在がある。

それは時間を通じて流れて居る我々自身である。持續する我々の自我である。」(La Pensée, Introduction à la méta., p. 206) ヘルグソンの云ふ所の持續する自我が何であつたか——Essai etc. に就て願ひて置かう。

ヘルグソンに依れば、自由と人格の問題の核心は、我々が時間と擴がり、繼時と同時性、即ち質と量とを普通に混同するといふ點に成立した。(Avant-Propos) 即ち一方に於て我々は質に於て同一でありながら甲乙區別せられる同質環境即ち空間の觀念を持つて居る。そしてかゝる空間の圖式の中に、それと全く質を異にした内的持續を投影し屈折せしめ、かゝる空間的展開に於てのみ具體的持續を考へて居る。しかるに純粹持續即ち時間は、同質環境と全く異なり「融合し浸透し合ひ明確な輪廓がなく相互に外化する傾向がなく數に何の關係もない質的變化の繼續」(p. 70)であつて、純粹異質の不可分な力學的進行と云はれる。所でヘルグソンはこの様な空間と持續の全く異つた形相に應じて自我に二面を區別した。普通の場合にそれで我々の満足して居る自我は、同質環境に屈折せしめられて互に外在化された諸部分より成る自我の影であり、表面的自我 *Je moi superficiel* (p. 55) である。それに對して内的自我、具體的なる自我は、意識が空間中に展開させ並列せしめない、相互に外的な部分に分離せしめない、——否さうするや否やその本質に深刻な變化を與へることになる所の——質的内的に浸透し合つて力學的進行を形成して居る具體的持續のそれであつて、これ

が現實の自我即ち根本的自我 *le moi fondamental* (p. 97) をなすのである。前者はそれが空間に投影され外面化された諸状態より成ることに依つて社會生活全體の要求に應ずる——何故なら社會生活は自我の空間化を必要とするので、例へば言語は我々が具體的持續に於て知覺する漠として動的な流れを固定化することなしにはそれ等を捉へ得ぬが故に、——これがベルグソンに依れば自我の社會性を形作るものとして自我の非人格的部分を成すのである。この表面的自我の下に具體的持續の形成する根本的自我を認めることは窄である。何となれば、我々の外的生活即ち社會的生活は我々の內的個人的生活よりも我々にとつてより多くの實際的重要さを持つて居るからである。然し眞の自我と云はるべきものは、ベルグソンに於て、內的動性としてのこの根本的自我であつて、これが自由行爲の主體として眞の人格的と云はるべきである。表面的自我は、それに對してそれを蔽ひかくして居る區別された諸状態の並列より成る自動機制とも云ふべきもので、日常行爲の主體をなすものと云はれる。

以上の如く、ベルグソンに於ては人格性、社會性と云はるべきものは、それぞれ根本的自我、表面的自我として持續と空間に對應して考へられた。具體的自我の人格性と云はるべきものは、並列、相互外在性、擴がり等の諸觀念を拒否する純粹持續の構造に於て、質的多數性の力的進行と綜合の動性自體に於て成立すると考へられた。自由とはこれを云ふのである。自我の存在 *existence* とはかゝ

る持續の動性に於ける根本的自我を指すのである (L'évol. créat. p. 1-1)。この點より見れば「一」に於て見た如き人格性の考へ方の根底にあると考へられる所の、何等かの意味で不動の統一體、內的核心の如くに考へられ、靜的本質として自己の人格性を見出さんとするのは、持續の動性たる具體的自我の人工的模造であり影にすぎず (La Pensée, Introduction à la méta. p. 206-223)、單に靜的な觀念の分析と並列の立場に於て考へられ、動性それ自身として具體的自我を不動化し、持續の構造を、空間的象徴に翻譯するものであるが故に、具體的自我を最初より逸するものであると云はれる。持續の形成する根本的自我は、「我々が欲求し意欲し行動するのはかゝる持續の全體を以つてなすのである」(L'évol. p. 6)と云はれる様に、行動の動性の內的構造であると考へられるのであるが、かゝる行爲の動性の「内から」の把握なくしては具體的なる自我の人格性は考へることが出來ない。即ちベルグソンに於て人格性に對する行爲の動性が內的に本質構造的に考へられて居ると云はなければならぬ。

然しながらそのことは直にベルグソンの云ふ如き持續の形成する根本的自我が眞の人格性をなすと云ふことを歸結せしめるであらうか。「内から」の把握としての持續の構造に注意しつつ、特に社會性との關聯に於て、その水準に於て、その點を考へて行きたいと思ふ。差當つてベルグソンの以上の分析からして導かれたことは、社會生活がそれに依つて可能となりそれに依つて我々が外界に接

觸するのは表面的自我であり、「我々はその表面に依つて外界に接する」(Essai p. 95, 125)と「*Je suis*」とであつた。然し我々はこの點を問題として取上げることが出来ると思はれる。若し具體的持續の動性を固定化し空間化し非人格化して考へられる表面的自我が、自己の社會性を形成するのであり、我々は表面に依つて社會生活に接するのであれば、社會性は具體的的自我に對しては畢竟、外面的、非本來的のものに過ぎぬと考へられるであらう。事實ベルグソンに於ては社會生活は自我にとつて單に實際的重要さを持つに過ぎぬと考へられた。然し我々はかゝる表面的自我を以つて具體的の自己の社會性なりと見ることは出来ない。自我にとつて社會性は、より本質的、基礎的な意味を持つのでなくてはならない。ベルグソンに於て以上に見た分析が、意識に與へられたものに關するそれであつたことを考へれば、我々は容易にこの點に關聯するベルグソンの立場が内在的個人的であることを指摘することが出来るであらう。ベルグソンがこの表面的自我を、それとの類比で考へた空虚不動の空間、同質環境なるものは、後に云はれる様に精神の見地をなすに過ぎぬものであるとすれば(La Pensée, Intro. etc. p. 231)それは既早現實の自我の一面を形成するものと考へられることは出来ない。否寧ろかゝる表面的自我ではなく、ベルグソンに於て内在的個人的なものと考へられ、空間と何等拘りない時間性であり具體的に眞の自我と見た純粹持續の根本的的自我自我が、却つて逆に自我の具體的に直接な社會性の性格を、その構造上持つのではないかといふ點を問題にして見たいと考

へる。

この内的自我はベルグソンに於て、意識に直接與へられたものとしてそれ自身に何等の空間性を含まず、それとは全く無縁な純粹な質的持續であると考へられた。差當つてこの意識に與へられたものであるといふ條件が一つの事柄を語るものと見られる。何となれば、かく云はれる時それは空間といふものに關係する特定の前提の下に云はれ得たと考へられるからである。「我々が鐵槌の打撃の連續を聞いて居る時、それは純粹感覺として不可分の旋律を音が作り、「一打一打全體の質を變じながら力學的進行の持續を形成して居るであらう。然し我々はその具體的持續を「同一の諸相に分割し、「空間に展開させ、結局現實持續をその象徴的表象たる同質時間に變へてかゝる觀念に到達するであらう。而しながら何故こゝからして「一言でつくせば我々の自我はその表面に於て外界に接する」と云はれ得るのであらうか。(Essai p. 95) 純粹感覺に於て旋律として捉へられた質的進行、かゝるものとしての内的根本的自我は、何處からかゝる持續の内容を得たのであらうか、——それは云ふ迄もなく鐵槌の打撃からであらう。我々が純粹感覺の内面性に於て、具體的持續の動的相互貫入といはれる質的組成に於て捉へるにせよ——これがベルグソンの時間性としての根本的自我をなす——或は反省意識に於て、それを同質環境に並列して量的多數性の形式で數へるにせよ、兎に角鐵槌の打撃は我々の外で働いて居るのでなくてはならぬと云はなくてはならないであらう。

若しさうとすれば、質的持續なるものも、單に內的なる深みとのみは云ふことが出來ず、却つてかゝる內的持續を形成しそれとして自己を表現した、かゝる意味での外の鐵槌に關係して居ることは明である。云はなくてはならないであらう。云ふ迄もなくそれは、ベルグソンに於ける同質環境に固定化され、外的並列に分析されて數へられる意識の對者としての鐵槌の打撃ではあり得ない。然しそのことからして我々の自我はその表面に於て外界に接するといふことは特定の條件なくしては云ふことが出來ぬと考へられる。旋律の內的持續を生んだ生きた鐵槌の打撃——純粹持續を具體的な內的自我と云ふならば、かゝる內的自我をかゝるものとして生せしめ動かした外界はなくてはならない。[Essai]に於て外界が直に同質空間と云はれる空間性と等置された時、それは空虛不動の知的空間であつて、あくまで「外から」の見方の下に於ける意識の對者であり、今見た如き、却つてかゝる持續を生みかゝるものとして自己を表現する如き、「内から」の見地を通じての具體的に外なる外界ではなかつた。若しさう云ふことが出來るとすれば、眞に外界と云はるべきものは、ベルグソンが同質環境と呼んだ如きそれではなくて、亦總じて何等かの意識的認識に現はれて我々に歸屬する如きそれではなくして、云はば全く逆の方向からして——純粹持續を內面的自我の意識の直觀に直接に與へられた具體的狀態と考へることが正しいとすれば、かゝる內的持續として自己を表現しそれを含む外界であると云はなければならぬのではないであらうか。それは生きた外、時間性を含む

外界である。ベルグソンに於て純粹持續は單に内的な深き心理的生命の構造としてのみ考へられたのではなく、實在一般の構造として、精神に直接與へられる外的實在は我々が自己の内部で見出す持續の構造をモデルとして考へられる所の動性であり (La Pensée, Introd. etc. p. 237-8)、實在は純粹持續の構造を持つ運動と變化自體であり (La Pensée, La Percep. du change. p. 179-90)、物理學は逆の方向の心理學である (L'évol. créat. p. 220)、と云ふ如くに考へられて居る。然しこゝで考へたいのは、自我の内的持續をモデルとして外的現實を表象するといふことではなく、——かくモデルとして表象されるといふことが暗示する様に——逆に、かゝる具體的な外的現實が却つて内的持續の根本的自我を形成するものではないかといふ點である。外的實在が動性であり傾向であるならば、それは持續の内的力學相に對應する力的なるものとして、持續の内的自我と云はれたものは實は、——ベルグソンが象徴的要素と區別した意味に於て (La Pensée, p. 215)——その現實的部分を成して居るのではないかといふ點である。斯く考へることは既早純粹持續を單に内から見ることはなくして、却つて内を超えた外からそれを考へることを意味するものであらう。然し例へば「物質と記憶」に於ける、物質を貫通して流れた全幅の力が身體に於て不決定に陥り、その一部が外的知覺となつて現れるといふ如き思想の方向を辿るならば、持續の内的自我と云ふのは動性としての物質、外的現實の振動 (La Pensée, Introduction p. 35) の内的表現であると見ることも可能ではな

いであらうか。

扱て若し以上の如き方向からして考へることが出来るはずれば、内的持続の根本的自我とは、ベルグソンに於けるとは全く異なる方向から全く異なる性格を持つことになるであらう。即ちそれは内的個人的のもの眞の自我であるといふことは直には出来ないと思へられる。端的に云へばこの根本的自我の質的持続と云はれたもの自體、直接に定立せられる限り、動性たる外的實在、——デュルケムの明にした様に特に勝れてかゝる意味に於て考へられる所の社會の、力的諸傾向に依つて浸透されそれに動かされて居り、持続の動性その旋律と呼ばれたものは、自己のそれと云ふよりも寧ろ外的實在としての社會現實の動性であり、その様々なる傾向の變化と流動に直接浮びその直接な限定であると思へることが出来ると思へられる。即ち内的根本的自我とは寧ろ動性たる空間の直接表出であるに過ぎず、眞の自己であるよりも却つて自己の無であると思へられる。恰もベルグソンに於ける持続が寧ろ過去の連續に重點があり、一元的無構造的に流動的であると云はれる點に於て、それは具體的空間たる外的現實の振動の内的表現を内から捉へたものと考へることが出来る。而して社會は具體的にはベルグソンが内的持続の構造をモデルとして考へると云つた外的現實であり、それは諸壓力諸傾向の流動と交錯を含むデュルケムの言葉を借れば「動きつゝある力の體系」(宗教生活、古野譯七四三頁)と云はれるものである。即ち根本的自我は、かゝる力の動く體系に流され浮

びその現實的部分として、その直接表出に歸すと見做すことが出来る。

斯く考へるならば、根本的自我が自己の具體的人格性であると考へることは出来なくなるであらう。純粹持續の質的相互貫入の動的構造は、外からそれを靜化する如き並列と外在性と擴がりの觀念的分析の立場から捉へ得ぬものとするも、然しそこから直にかゝる内的持續が眞の人格性であり、自由行爲の主體であると云ふことは出来ない。ベルグソンが社會性と同置した同質環境の抽象を脱却したと云ふも、尙却つて動性たる具體的社會現實に含まれ、その直接攪弄する所のものとなるのではないかといふ問題を殘すのである。この點より見れば、ベルグソンが自由行爲を以つて、同質環境との類比で考へられた表面的自我の日常行爲が表面に固定せられた諸理由を持つのに對して云はゞ無理由であり、かゝる無理由は、却つて具體的自我がその外的殻を破つて決心に迄至つた所の、最も内的なる念願、思想、感情の總體の外的示現であると云ひ、それは唯自我のみより發し自我全部を表現するものであると考へ、更にかゝる行爲の無自覺性をも云ふ時 (Essai p. 130) 此れは明に分析と並列の見地に反對して逆の抽象に陥つたものと考へられる。何故ならば、かゝる内的自我の直接表出としての情緒的行爲は、直接衝動的のものとして、却つて持續の内面へ喰ひ入りそれを形成する特定の外的傾向の動性に直接融合して、逆に自由を失ふものとなり得ると考へられるからである。自我のみより發し自我の全部を表現すると云はれたその自我の内容は、却つて上に見

た如き自己の認識に現れずして自我内部に貫通する動性たる外的現實の特定内容の直接示現に過ぎぬのではあるまいか。それは日常行爲の理由を脱却すると云はれた丁度その點で、却つて具體的に内なる社會現實の理由に捉へられるものであり、ベルグソンの云ふ如く、測定には違反する状態のものでありながら (Essai p. 179)、却つて端的に統計と表との上に現れざるを得ぬものである。デュルケムが「自殺」論に於て、統計的實在としての自殺の社會的流れを指摘し、ベルグソンの所謂空間並列に相應する個々通常の動機ではなくして、實にかゝる主體の内部を貫通して自己を實現する社會的流れが自殺の眞の理由であると化した場合の思想はこゝに關係すると見ることが出來ぬであらうか。かゝる自由行爲の眞の主人公は自己ではない。それは眞の自己でなく人格性であると考へることが出來ない。換言すればかゝる内的自我の直接表出には具體的存在性、自己の現在がない。持續の構造に於て、運動と變化に、運動するものと變化するものがなく、運動と變化自體の動的統一の基體性が云はれる場合に (La Pensée, La Percep. du chang. p. 185, 197)、内的持續の運動と變化自體が外的實在のその直接限定ではないかと考へられるに至つて、根本的自我とは却つて自我以前であり、外的現實の部分として寧ろ自我の社會性をなすのではないかと考へられる。

ベルグソンの根本的自我は行爲の内面的動性に於て捉へられたものであつた。それは人格性の内的構造自體が動性として考へられたのであつて、「一」に於て見た如く人格性を何等かの自己の核心

なり或は靜的本質なりとして考へんとする見方に對しては、根本的に異なるものであることは先に見た如くであらう。然しながら同質環境と呼ばれる如き抽象的空間性を以つて自己の社會性を考へ、かゝる空間の決定性を脱却して、直接に内的持續の流動を眞の自己の人格性なりと考へんとした時、それは單に内的であり直接なるものとして、却つて内を「内から」超えた外の力的動性としての社會現實に含まれ、その直接なる表出に歸すと考へられた。動性に於てとは云ふも單に直接内的であつた點に以上の如き方向からの問題が提起され得た。社會はかゝる持續の行爲性の内的流動を含み、それに自己を表現する如き、云はば行爲の水準に於て外的なるものと考へられる。根本的自我はかゝる意味の社會に於ける自己の社會性の性格を持つものと考へ得る。而してこゝからして同時に明であることは、自己の社會性と云はるべきものゝ具體的なるものは、既早ペルソナの如き、靜的核心として豫想された個人主體にとり畢竟附帶的である如き規定ではなくして、内的に力的なるものとして、行爲的に自我の内面を貫通し、自我の内容を構造する如き性格のものでなくてはならぬといふことである。かくしてのみ自己に對して自己の社會性は根本的規定たり得るのである。以上の如くに根本的自我を考へて來るならば、却つてそれこそ自己の社會性と考へられ得るのであつて、かゝる點から更に新に人格性は問題とされなければならぬ。即ち人格性に對する社會的實踐の意味が具體的に追求されなければならない。何となれば持續の根本的自我を以上の如くに考へ

得たのは、それがあくまで意識の見地に於て空間から持續が見られて居た故と考へられるからである。然し眞の人格性は寧ろ逆に持續の行爲性自體に身を置き、かゝる根本的自我が却つて外的現實の動性に直接限定され、かゝる自由行爲は純粹であればあるだけ自己の中心がなく現在のないことを見て、こゝから持續に於ける持續の超越としての眞の實踐的存在性に於て求められるのでなくてはならないと考へられる。根本的自我は構造上自覺なき行爲性の自己であつた。直接なる社會性の構造を持つて見られる所以である。眞の人格性は動性に即しつゝもあくまで自覺ある實踐の主體でなくてはならない。その爲めには自己の社會性の内實を更に考へなくてはならない。

〔三〕

根本的自我が以上の如くその構造上自我の寧ろ直接なる社會性と見られ得る性格——社會性の水準に於て純粹にその構造に注意して、——を持つとするならば、ベルグソンが持續の空間化、非人格化として、自我の社會性をなすものと見た表面的自我は如何に考へられるであらうか。

この表面的自我の具體的なるものを、我々は *Les deux sources.* に於ける社會我 *le moi social* に於て (p. 8) 見出すことが出來ると考へ得よう。そこで *Essai* に於て表面的自我に與へられた規定と殆んど同一の言葉で、「意識が深みに働きながら益々下つて行くにつれて、他の人格と通約し得ない更には表現出來ぬ益々獨自の人格を啓示するものならば、我々は自己の表面に於て他の人々と連

續して居りそれ等に似寄つて居り、相互の依存を兩者の間に生み出す訓練に依つて彼等に結び付けられて居る」(G. C.)と云はれ「我々の自我が普通に結び付く所は、他の外面化された人格の緊密な組織に自己を挿入する點に於て、その表面に於てである。即ち我々の自我の安定性はかゝる連帶性にあるのである。そしてそれが結び付く點に於て、自我はそれ自體社會化されて居る」(G. S.)として社會我が規定されて居るのを見出すのである。即ち表面的自我と同様に、自我は表面に於て社會化せられ、それに依つて社會に連帶するものと考へられて居る。従つて *Essai* に於ける表面的自我と *Les deux sources* に於ける社會我とは同一の性格に於て考へられて居るといふことが出来る。と考へられる。いづれも眞の人格の非人格化として、自我の深みの表面化として考へられて居ると云ひ得るのである。

然しながら果してこの表面的自我と社會我とは同一の性格と構造に於て考へることを許すものであらうか。先に表面的自我が具體的なる自我の社會性をなすものではないことを考へた時、それはこの表面的自我がそれとの類比で考へられた同質環境としての空間性が、具體的自我の社會性の規定がそれに依つて考へられる現實的社會の空間性と全く性格を異にし、單に却つて自我に歸屬するものに過ぎぬ知的空間であり、精神の見地をなすに過ぎぬものであつた故であつた。かゝる同質環境へ具體的持續を空間化し固定化することに依つて社會生活の中に入るものであると考へることは全

く内在的個人的であつて抽象的たることを免れないものと云はなければならぬであらう。言語がそれに平行して單に固定性に於て、非人稱的な滓として客觀面の無生状態に於てのみ把へられたことが、それを證左すると云ふことが出来るであらう (Essai, p. 99-101)。即ち表面的自我がそれに依つて考へられた同質環境と、社會我の背景としての「閉ぢた社會」の責務の體系とは、全く意味と性格を異にするものであることは明白であると云はなければならぬ。即ち前者は意識の對者であり認識の客觀面として、全く我々に歸屬する如き、所謂行動の可能なる範圍と云はれる如き意味に於ける客觀的空間性であるに對し、後者は寧ろ逆に我々がそれに歸屬し、我々の存在と行爲がそれに依つて浸透せられて居る如き動性としての主體的なる力的空間性である。「閉ぢた社會」の責務の體系は、例へ非人格的定式に還元せられ得るものであるとするも (p. 20)、*poussée* 或は *pression* に特色付けられる (p. 30)、*デュルクムの明にした如き非人格的力の空間性でなくてはならない*。表面的自成一と社會我は從つて全く性格を異にするものであり、同様に非人格的と特色付けられるにしても、前者の、具體的持續がそれに依つて固定化され並列外在化せられる意味の單に客觀的なる非人格性に對しては、後者の非人格性は具體的自我的持續の内容として人格的自我的内實を形成すべき方としての社會的質料の主體的方向に於ける非人格性でなくてはならない。即ち兩者は云はゞ方向が逆であると同時に次元を異にするものと考へられる。即ち兩者は既早同一の構造と性格に於て考

へられることは出来ぬと云はなければならぬであらう。一言で云へば表面的自我の社會性は背後に既存する人格的なるもの、非人格化であるに對し、社會我の社會性は、云はゞ未だ存せぬ人格的なるものがそれを内實として構造せらるべき非人格的社會力であると云ふことが出来るであらう。斯く云ひ得るのは、ベルグソンに於て先に述べた社會我の規定を別にして、閉じた社會の責務が外から個人に来るのではなく (p. 11)、社會我は「個人の中の社會」として却つて個人に内在的であり、従つて個人は社會の諸習慣に無意識に合致した行爲をなし (p. 12)、責務は寧ろ何等の努力なしに自働的に實現されそれは *laisser-aller* であり *abandon* である (p. 13)、といふ如くに語られるからである。社會我が「個人の中の社會」であり責務が寧ろ *laisser-aller* として個人に血肉たる如きものであるとすれば、社會我は表面的自我の如くに意識の表面に於て形成せられる如きものであることは出来ぬ筈であらう。否それは恰も先に根本的自我が直接なる自我の社會性に歸すものであることを見た際に想定した、具體的に外なる動性としての社會現實の内面的形成として、個人にとつて却つて根本的——持續の根本的自我が根本的と呼ばれた意味で——であり、非人格的力としての社會的質料の内的に形成するものであると考へられなければならない。義務や慣習は分析と並列の抽象的定式に還元せられ得るものであるとするも、その現實的性格は、社會的壓力として、個人の内部に浸透し、個人の行動に自己を實現して組織化し、斯くて個人の存在の動的構成者となり個人に於て自己

を、逆に云へば自己に於て個人を形成するものでなくてはならない。斯く考へられれば、社會がそれに依つて考へられた「閉ぢた社會」は、主體的なる非人格的力の體系として、先に根本的自我的持續をモデルとして考へられると云はれた力的動性としての外的現實と考へられるものでなくてはならない。即ち社會我は却つて根本的自我と同一の力的なる外的現實に基くものとして、それ自身根本的と特色付けられ得るものと考へられる。それは決して表面的自我の如く自我の表面化に於て形成せられるものではなく、自我の行爲を貫通して實現せられる義務や慣習の社會的質料の力的動性自身であるのでなければならぬ。根本的自我の構造に依つてその社會性を考へた如く、今社會の根本性とも云はるべきものが考へられるのである。社會の個人に對する運命的限定と云はれるものは、かく社會我的自我に對して根本的であること、外的現實としての社會が内的持續の行爲性に於て自己を實現し、かくて個人の内面を形成する必然を、差當つて云ふのであらう。根本的自我が却つて持續をモデルとして考へられる外的現實としての社會力の個人的表現であると見、持續の直接表出が單なる社會性に轉落すると考へた時、それはかゝる社會現實が個人の持續の内面を貫通し個人の行爲に自己を實現して社會我をなすに過ぎぬと考へられることを指したものであつた。社會我もかく行爲に即し力的性格に於て捉へられるならば——デュルケムが道徳的集合力としてのトテムの禮拜に就てこの事情を指摘した如く——却つて持續の内面を形成するものとして根本的であると

特色付けられ得ると考へられる。

以上の如く考へれば、社會我は、社會性として考へられた根本的自我と同一の性格を持ち、それと同一の基底に於て一を成して居るものと考へられるであらう。兩者は以上見た如くに考へれば、單に見る方向の差違を有するに止つて、いづれも持續の内面を通じて實現される力的動性としての社會現實の個人的表現に他ならない。然しながら斯く考へるとしても、かゝる社會我が何故表面的自我と同一の性格に於て自我の表面であると云はれ得たか、——この點を追求すれば我々はベルグソンに於ける社會我の考へ方と「閉ぢた社會」のそれとの間に一の乖離の存在すること、そして「閉ぢた社會」の考へ方にこの方向を指示するものゝあつたことを見出すことが出来るのである。

ベルグソンの「閉ぢた社會」は慣習の體系たる性格に於けるものであつた。(5c)それはあくまで主體的性格に於て捉へらるべきものであつた。従つて、例へかゝる社會が慣習の構造に依つて有機體或は蟻蜂の巢に比較せられる必然性に近づくものであるとするも、兩者の示す法則性は、後者は單に客觀的な *la loi qui constate* として、前者は主體的な *la loi qui ordonne* として、明瞭に區別せらるべきものであつた。(5d)。即ち「閉ぢた社會」の現實的性格は、主體的に持續の内面を貫通して自己を實現する非人格的方の體系たるべきものでなくてはならなかつた。ベルグソンの「閉ぢた社會」に對する諸分析がそれを示す如く、所謂內的持續をモデルとして表象されるといふ如き主

體的性格が「閉じた社會」に固有であるべきであつた。然るにベルグソンに於て、かゝる「閉じた社會」の現實的性格にも拘らず、明瞭に區別せらるべき有機體或は蟻蜂等との類比が押進められ、結局「閉じた社會」の責務の總體が生物學的に解釋せられることに依つて兩者が同じ種類の羈絆である (p. 83) と云はれるに至つて、我々はこゝで重要な次元の差異、視點の飛躍がなされて居ることに注意することが出來ると考へられよう。何となれば「閉じた社會」は持續の主體的方向を通じて始めて現實的であるのに對して、有機體等に對する類比は寧ろそれを同質還境の地平に於て解釋することの意味する故である。個人の中の社會と云はれる如き「閉じた社會」の主體的性格は、責務の總體が生物學の意味に純粹化せられることに依つて客觀化せられる。従つて我々は「閉じた社會」に云はゞ一の二重性を指摘することが出來ると考へられる。一方に於てそれは主知主義の分析的方向を否定し、單なる抽象的定式に還元せられぬ所の *poussée, pression* に特色付けられる主體的なる非人格的力の體系であつた。こゝに於て重要なのは個人の中の社會としての、持續の内的方向を通じて見られる現實的性格にあつた。然るに他方、責務の總體が抽出されつゝ生物學的構造に純粹化されることに依つて、云はゞ再び同質還境の方向へ客觀化せられ固定化された。靜止と見られることが可能となり、スタティックと規定せられたのはそれに依るのであると考へられる。即ちこゝに於ては「閉じた社會」の主體の意味が抹殺せられて、非人格的定式に還元せられ、ばせらるゝ程完全である

(p. 29, 47) と云はれる如き性格が由來すると同時に、他面、圓環運動と見られることに依つて、「閉じた社會」の構造に現實の歴史の動性が否定せられたのである。即ち「閉じた社會」はそれ自身主體的に力的動性に於ける非人格的力の體系たると同時に、他面圓環運動と見られることに依つて同質環境の地平にスタティックと規定せられる二重性を持ったのである。我々の根本的基礎的なる道徳的構造が造られて居るのはかゝる生物學の意味の「閉じた社會」に對してあると解釋し、それが静止と見られる構造を持つのに對して、運動としてデュナミクと云はれたものが歴史的實踐の方向でなくして寧ろ無歴史的な縦の切斷面の所謂「開かれた」方向に於ける愛の神祕主義であつたのは、「閉じた社會」の持つた後の性格に由來すると考へることが出来るであらう。空間に對する持續の方向としての「開かれた社會」と「開かれた魂」が、社會性と實踐性に即する人格性の自覺に對して無縁であり、却つてそれを撥無する如き意味を持つのは、「閉じた社會」がスタティックと見られることに依つてその主體的意味が抹殺され、その含む現實の動性が無視されたことに由來すると考へられる。云ふ迄もなく社會の現實的構造は歴史の動性をそれ自身の中を含むものであつて人格主體の實踐を容れるものでなくてはならない。従つてかゝる客觀的方向の「閉じた社會」よりしては、本質上動性がそこに含まれることがない爲めに、具體的社會の歴史の動性は構造上考へられることが出來ず、ベルグソンに於ての如くかゝる靜止的構造に對して動性を飛躍的に愛の神祕主義として考へ、従つ

て人格性も神祕主義的な「開かれた魂」として考へるのでない限り、單なる生物學的構造の「閉じた社會」のスタティックに於ける「閉じた魂」よりしては實踐的に考へられることが出來ないであらう。否かゝるベルグソンの方向でなくして、「閉じた社會」の有した主體的性格即ち持續の内的方向を通ずる非人格的力の體系たる性格を重視し、そこから現實社會の持つ横の歴史的構造にそれを媒介せんとするならば、この「閉じた社會」は何よりも慣習の體系として、云はゞ「閉じた社會」の閉じた方向即ち社會の現實の歴史の動性に於ける統一的圓環運動的方向の極限類型と解することが出來ると見られないであらうか。慣習の有する閉じた體系への壓力が、この「閉じた社會」の基礎的意味であつたと考へることが出來るならば、それは社會の歴史の構造に内在してその動性を形成する過去の統一的傾向の構造と考へることが出來るであらう。慣習の構造はそれ自身、先に「閉じた社會」に就て見た二重性を持つものである。ベルグソンの「閉じた社會」は、かゝる慣習の體系を極限に純粹化し生物學的類型に解釋して、現實の歴史の構造の單に一傾向—過去の統一的傾向を、社會の歴史の構造自身に置き換へたものと見られ得ると考へられる。

扱て若し以上の如く「閉じた社會」に一の二重性が考へられ、然もその現實的性格はあくまで主體的なる非人格的社會力の體系と考へらるべきものであるとするならば、表面的自我と同様の性格に於て考へられた社會我がこの現實的性格と矛盾するものであることは言ふ迄もなく明白であらう。

例へ「閉ぢた社會」の考へ方にその方向を指示するものがあつたと云へ、我々は既早社會を表面的自我と同様に考へて、従つて自己の單なる深みに於て益々獨自な人格を見出すといふ如くに考へることは出来ぬと考へられる。斯く考へることは畢竟人格性を直接に内在的な核心と考へんとすることであつて、實踐的なる人格性の自覺ではないと考へられる。否社會我と云はれたものは、却つて力的に自我を貫通し自我の内面を形成したものであるとしての社會力の表現であり、根本的と云はれなければならぬと考へられる。社會我は決して單に表面ではあり得ない。社會性に即する人格性の自覺にとつてはこのことを確認するのではなくてはならぬ。

然しながら、社會我を以つて以上の如くに内面を形成し却つて根本的であると考へることは、それを直に人格性と等置することではないであらう。デュルケムに於て、かゝる社會我が人格の意味であると考へられ、非人格的力としての道德的集合力が身體を個別化の原理として個人に實現されたものが人格であると云はれた場合(宗教生活、古野譯四四七—五二)、それは最初に見た如く、實踐的自己の自覺が捨象されて居た爲めであると考へられる。身體が個別化の原理であることは正當であるとするも、それはデュルケムに於て考へられた如く單に有機體の生理的個性に基けられ、従つて道德的集合力が平面的にそこに於て屈折し染色せられる特殊な環境であると云はれる如き意味に於てあることは出来ぬと考へられる。かくしては全く靜的平面的であつて、個人の人格性は

その社會性に對して獨自な意味を持つことがなくなると考へられる。身體が個別化の原理であるのはベルグソンに於て考へられた如く行動の中心として外的力がそこに於て不決定に陥り却つて身體を俟つて決定せられるといふ如き意味に於てはなくてはならないと考へられる。實踐の歴史的構造を缺いたデュルケムの意味に於ける集合力の單なる有機體に依る制限は、ベルグソンの社會我をなすにしても、決してそれを以つて自覺的なる自己の人格性と等置することは出來ぬのではあるまいか。ベルグソンは自己の尊敬について尊敬せられる自我を二つの社會に應じて區別し、社會我は單に閉じた社會に屬する自我に過ぎぬことを指摘した (Les deux sources, p. 67-67)。人格性にとつてはかゝる開かれた獨立性の契機が必要であつて、單なる社會性を以つて人格性であることとは出來ない。さて若し今ベルグソンに於ける如く「閉じた社會」を生物學の意味の同質環境的方向に制限することに依つて、持續の方向として飛躍的に想定せられた「開かれた魂」を以つて自己の深みに於ける眞の人格性と考へるのでなく、社會我を寧ろ持續の主體的 direction を通ずる「閉じた社會」の表現と見て却つて根本的と考へ、それに對して眞の人格性を社會的行爲に即して見出さんとすればそれは如何に考へるべきであらうか。具體的人格性を行爲の動性と社會性とに即して見出さんとした二重の要求は、根本的の自我と社會我との關係の問題として考へることが出來るであらう。我々はこの兩者の關係を更に立入つて考察しなければならない。

根本的自我をば、その動的構造にも拘らず内在的個人的なる直接性の故に、それを社會の水準に於て考へるならば却つて動性たる社會質料の内的表現として自己の直接なる社會性に歸すものと考へ、逆に社會我を以つて決して表面的自我と同視されぬ「閉ぢた社會」の壓力の内的形成として根本的と特色付けられるものと考へるならば、この兩者は如何なる關係を持つものであらうか。

根本的自我の内的持續が、それだけとして見れば單に内的であつて主體の中心を缺き、従つてその持續の流動が却つてそれをモデルとして考へると云はれた外的實在の動性に直接融合し社會性をなすことを考へた際、外的實在こゝでは社會は、持續の方向に於て持續を自己の現實的部分として含む如き性格に於て見られた。それは持續の様相に於て捉へられた非人格的力の流動であつた。然るに今社會我を以つて同様に主體的と考へ、従つてその背後の「閉ぢた社會」を主體的意味に於ける非人格的社會方の體系として考へるならば、具體的にはこの兩者の同一の背景たるべき社會現實の構造は新に考へ直されることを必要とするものであらう。何となれば、社會我の背景としての「閉ぢた社會」を先に述べた如く慣習の體系として主體的に我々に内在的な社會の圓環運動的統一的傾向であると解するならば、社會の動的構造は、明かにベルグソンの「閉ぢた社會」の解釋の如く生物學的意味に平面化し、従つて靜止と規定せられ得る如きものであり得ぬと同時に、他面意識の内的直

觀によつて見られた持續の一元的流動性をモデルとして表象せられる如きものでもあり得ぬ故である。ベルグソンに於て外的實在の動性が内的持續のそれに依つて表象せられた場合、後者の動性は分析的幾何學化とは根本的に方向を異にするものとは云はれても、それは飽くまで意識に與へられた限りの動性、靜よりして直觀された限りの動に他ならなかつた。持續が音樂の旋律に比較せられる如き構成を既に持つものであつたことがそれを證左すると云ひ得るであらう。然るに今、社會の非人格的力が、主體的なるものとして却つて主體の内面に貫通して働き主體の行爲に自己を實現する如き性格を有するものと考へ、それに對して逆にかゝる力的なる社會の中で働かんとする實踐的なる主體の立場からして考へるならば、社會の動的構造は内觀によつて表象せられる持續に比せられるのでなく、寧ろ過去の統一の傾向と未來的分裂の傾向を自己内部に含んで、その相互否定的なる實現としての動性であるのでなくてはならないと考へられる。現實の動性は、意識に與へられた限りで見るのでなく、云はゞ行爲する自我の内面を内に向つて超えた背後に於て考へられるならば、それ自身に創造的なるものとして力的諸傾向の統一と對立を持つものでなくてはならない。ベルグソンの「閉じた社會」が生物學的に純粹化され靜止と考へられたのに對して、ベイエがデュルケミスムの立場から、寧ろ様々の方向に於ける諸壓力傾向の闘争と交錯が社會の現實であり、動性こそが社會の原則であると批評した場合は、之を指すものであると考へられる。それは持續の如き構成を

まぬと同時に、單に内的ではなくして却つて外的であると云ふことが出来るであらう。即ち非人格的力の分裂的動性がベイエの云ふ如く社會の現實たるのである。

従つて若し以上の如く考へられるとすれば、慣習の體系の圓環運動に即して考へられた社會我は、社會の動的構造に含まれる一傾向である過去の統一的方向の、我々自身に於ける内的實現として考へられるものと云ひ得るであらう。單なる社會我といふものはそれだけでは自己の自覺といふことがあり得ぬ故に考へられず、我々の現實に持つて居る社會的自覺と知性は、閉ぢた圓環運動に對する躊躇である (*Les deux sources*, p. 13, 94) とするならば、かゝる躊躇の存在は分裂的未來的傾向の現實の動性自體の中に含まれて居ることを示すのでなければならぬ。躊躇はベルグソンの云ふ如く例外的な場合にのみ固有とは考へられず、自覺なき個人は考へられぬが故に、具體的行爲の全てに内在しつゝ我々の社會的自覺を可能として居るものと考へられなくてはならない。ベルグソンの分析に於てかゝる躊躇の現實的存在が輕視され、従つて一般に道德に對する知性の意味が極度に制限されたのは、それが道德の源泉の純粹な抽出に止つて、道德的現實の分析ではなかつた故であらう。その社會我が無躊躇であり従つて無自覺であるのは、それが單に現實の一つの動性の自我に實現せられた場合の純粹類型に他ならない故である。然し類型の靜體よりして自覺ある行爲的自我的動性は考へられることが出来ない。それは社會の圓環運動的なる非人格的力の主體的表現とし

て、自我の社會性の一面を形成するものと考へられる。しかればそれに對して根本的自我と云はれたものは如何に考へられるであらうか。社會の非人格的力の分裂的動性の一面たる統一傾向が、自我の社會性の一面として社會我と見られること以上の如くであるとするならば、それと同一構造に於て、表面的自我と對立せしめられて、知性の幾何學化を拒否しつゝ、自由行爲がその直接なる外的示現に成立するとして考へられた内的根本的自我は、今や社會の動的構造の、社會我がそれによつて考へられた傾向と反對の、分裂的未來的傾向の自我の内面を通ずる直接限定であり、直接表出に他ならないと考へることが出来るであらう。ベルグソンに對するソレルの方向がそれを意味したと考へられる。社會我がそれのみでは自覺が考へられなかつたと丁度正反對の方向に於て、それは單に流動的内的狀態の外的表出として、無自覺的であり自己の中心を缺いたと考へることが出来る。即ち表面的自我に對立せしめられた意味の内的根本的自我は、分裂的未來的傾向の直接表出として、自我の社會性の一面を形成すると考へることが出来るのである。この點から見れば、それは自我の行爲性の單なる内的捕捉として、實は却つてその一面的把握に歸したと考へられる。社會性に即する自己の自覺にとつては、それは却つて眞の人格性の喪失に他ならない。先に社會我に對して考へたと同様、それは無躊躇であり、従つて無自覺的流動性に止つたのである。

扱て若し以上の如く社會我と根本的自我がそれ／＼社會の相矛盾する方向に於ける非人格的力の

主體の内面を通ずる表現として社會性の構造を持つものであると見るならば、具體的人格性は如何に考へられるであらうか。先に我々は社會我が單に一傾向の純粹な構造たるに過ぎず、かゝる無自覺的な社會我に對する自覺の可能根據として躊躇の存在を考へた。今自己の社會性と考へられるものがそれ／＼相反する社會力の傾向に基くものとしてそれ自身に相反する方向の分裂的動性を含むものとすならば、かゝる躊躇は、單に閉ぢた圓環運動に對する例外的個人の initiative に由來する如きものではなくして、社會の非人格的力の動性に内在する分裂と矛盾とが個人主體の内面に實現されること、換言すれば自己の社會性の分裂に基くものであり、従つてそれは實に具體的人格性成立の積極的可能根據を意味するものであることを明にすることが出来るであらう。社會の動的構造に含まれる非人格的力の矛盾と分裂が、その躊躇を基礎付けると共に、この躊躇は、それが由來した矛盾の行爲的統一たるものとしての實踐的存在性に於ける人格性を社會的に根據付けるものであると考へられる。然も躊躇が直に意識即ち認識と自覺を意味した事情が我々にとつて重要なのである。即ち實踐的存在性としての人格性にとつては、認識と自覺とが固有であると考へられる。即ち躊躇は行爲的存在性としての人格性成立の可能根據たると同時に、かゝる主體的行爲の認識性を基礎付けるものと考へ得よう。自我の自覺的に行爲的なる存在性は、従つて、自我内面に力的なるものとして貫通する反對の方向の非人格的社會力の、何れにも直接限定せられて單なる無自覺的社

會性に歸すことなく、その相互矛盾に由來する躊躇即ち認識を持ちつゝ、行爲に於てそれを逆に決定するものである所に成立するものと云ふことが出来るであらう。即ち眞の人格性は社會我と根本的自我との自覺的統一である。具體的に動性たる外的現實としての社會は、云はゞ我々よりも更に我々にとつて内的であり、ベルグソンの内を更に内に向つて超えた外であり、かゝる外の非人格的力が内を貫通して自己を我々に實現するものと考へるならば、かゝる力的傾向の直接限定たる單なる社會我や、上に云つた意味に於ける根本的自我は、行爲と云ふよりも寧ろ動かされたものとしての慣性の如きものであり、自我の單なる社會性をなす極限であるに過ぎず、兩者の無中心に對する中心は、相矛盾する力的傾向が主體內面に躊躇として實現せられることに依る認識をそれに對して持つ所の、兩者の主體的決定としての行爲に求められなければならない。自我の眞の存在性はそこに考へられ自己の現在はその中に成立すると考へられる。

然しながら以上の如くに根本的自我を解するのは、ベルグソンに於て考へられた如くに、それが表面的自我と對立せしめられ、自由行爲がかゝる外的殻を破る持續の内容の無自覺的示現と考へられた限りに於てであることを尙注意しなければならぬであらう。元來知性の同質還境と質的多數の相互貫入の持續とは aspect として見出されたものであつた。然るにかゝる同質還境を現實に充當し、表面的自我として自我の一面を形成するものと考へ、従つてかゝる表面的自我への空間化を

拒否して持續の内容の純粹な示現をば持續の緊張として考へんとした時、實はそれは却つて持續の内容の貧弱化を意味せざるを得なかつたと考へられるのである。飽くまで表面的自我と對立せしめられ、同質還境への方向を拒否し、空間と持續を峻別して靜から動を見つゝ見られた純粹動性の中に躍入するものと考へられた根本的自我の自由行爲には、質的多數と云ふことは云ひ得ないと考へられる。意識に與へられたものとしての見る立場に於ては、自ら持續する行爲の立場に於て考へるならば、表面的自我と對立せしめられた持續の意味する純粹な方向、自由行爲としてのその緊張の極限と云はれるものは、却つて質的多數性の極小を意味する。その限りそれは單純内容の示現として、先に見た如く社會的水準に於ては、分裂的未來的方向に於ける社會質料の直接表出と考へたのである。然しながら根本的自我をそれ自體に就て考へるならば右の如く考へることは許されなうであらう。それは云はゞ質的多數の相互貫入の持續の統一的方向を、表面的自我と對立せしめることによつて極限化した方向であつた。然し今持續の質的多數の含む分裂的方向を重視するならば、それは表面的自我と對立すべきものではなく、相矛盾する力的傾向の統一の實現として具體的行爲する人格性の内的狀況と考へなければならぬであらう。本來質的多數性の持續は記憶なくしては考へられないのであるが、かゝる記憶の構造は、何等かの意味に於ける過去の現在に對する否定的分裂性とその現在の於ける統一性とを持つことなくしては考へ得ぬと思はれるのである。

記憶に依るかゝる内在的分裂性こそが持續の質的多數性を可能とする。持續の質的多數が融合し浸透する相互貫入の流動的統一を形成するにしても、その相互貫入はそれに潜在する記憶の内在的分裂を含まずしてはあり得ない。若し持續に於けるこの構造に注意するならば、それは既早單に内觀に現れる如き端的に一元的なる流動ではなくして、却つて分裂するものゝ統一の實現たる意味を有すること明白である。自己の背後に於て分裂するものを、主體的に自己の行爲に統一的に實現しつゝある内的狀況を、單に内から、意識に於て見たものが持續の質的多數性の流動であると考へられる。従つてこの方向から見れば、根本的自我は社會性に即して考へれば、社會我として實現される過去の傾向を含みつゝ、之に對する反對の未來的傾向が主體内面に分裂として實現されることに依るその統一的實現をば、その内實とするものであると見ることが出来るであらう。即ちそれは社會性の分裂に依る行爲的統一の實現として、實踐的人格性の内面状態と云ふことが出来るであらう。持續の持つ質的多數性の、記憶を媒介とする分裂的方向は我々をして以上の如くに歸結せしめると考へられる。

而して斯く根本的自我が分裂的統一であるとするならば、持續に潜在する所の記憶に依る分裂性こそ、先に我々が社會的に躊躇と見たものに他ならないと考へることが出来るであらう。躊躇は社會に於ける非人格的力の相矛盾する方向に於ける分裂性が主體の内面に實現されることによつて考

へられた。持續の質的多數性の可能根據たる記憶に依る分裂性は、主體に内在して持續の行爲的統一を可能ならしむるものとして、正に躊躇に他ならない。而して躊躇は意識と知性を意味した。我々はこゝにベルグソンに於て持續の空間化として考へられた表面的自我の現實的なる可能根據を見出すと考へることは出來ないであらうか。表面的自我の基礎的意味が意識の分析的客觀化にあるとすればそれは主體の行爲的統一に内在的なる躊躇に他ならないのである。従つて持續は既早表面的自我なくして考へ得ないと云はねばならぬであらう。持續の質的多數性に内在する分裂性は躊躇に他ならない故であり、躊躇は端的に表面的自我を意味すると考へられる故である。表面的自我を撥無する持續が、躊躇即ち質的多數に内在する分裂性を撥無する持續であり、その限りその内容の貧弱化を意味すると見たのはこの點に由來するのである。ベルグソンが意識の立場からして純粹化した同質環境と持續との、兩者の浸透現象と呼ばれたもの、即ち表面的自我と根本的自我が唯一の人格を形成する所以は、行爲の立場からして見れば右の如き構造を持つたと考へられるのである。約言すれば、社會性の分裂による行爲的統一の實現としての根本的自我は、社會性の分裂自身の意味する認識と自覺とを持つものであると考へられる。社會性の水準に於て以上の如く解された根本的自我は、従つて行爲的統一性たると共に自覺的統一性である。ベルグソンに於ては内的に行爲的統一性の方向が純粹化せられたに止つたと考へられる。然し單に内的たるに止らない社會に於ける自覺的

人格性は右の如き構造によつて解し得られるであらう。社會性と實踐性に即する人格性にとつては表面的自我は不可缺である。即ち知性の認識に媒介せられた社會的行爲の主體にして始めて歴史的實踐の人格性たることが出来るであらう。(完)